

ヤップ州ウリシー環礁島民の移住

田 島 康 弘

(2002年10月15日 受理)

Migration of Islanders in Ulithi Atoll, Yap States, FSM

TAJIMA Yasuhiro

Abstract

This study aims to make clear the tendencies of migration in Mogmog islanders, Ulithi atoll, Yap states, FSM. There are 35 households including 256 persons in Mogmog island in our investigation. One hundred and sixty-five of them lived inside the Mogmog island and 91 lived outside this island. Thirty percent of the people living outside lived in Yap Proper, 20 percent in Falalop, 10 percent each in Guam, Hawaii and USA. Many emigrants to Guam aimed to work and many emigrants to Pohnpei, Chuuk and Palau aimed to study ; the emigrants to other places had both aims. Many women moved to another place when they married.

第1章 研究の目的と方法

太平洋諸島は人の移動、移住現象が比較的顕著な地域として知られている。筆者は先に、ミクロネシア連邦ヤップ州離島民の、ヤップ本島における居住の諸形態について報告した（田島：2001a, 田島：2001b）が、今回は、離島のひとつであるウリシー環礁島民の移住現象に焦点を当て、その実態を把握し、そこに見られる諸傾向について整理することを試みた。

この地域の移住研究にとっての1つの問題に、家族概念のあいまいさの問題がある。この問題を考慮して、今回の調査では家族（family）の概念をさげ、世帯（household）の概念で調査を行った。世帯概念を使用しても問題がなくなるわけではないが、比較的やりやすかったことも事実である。

調査の概要は、この「世帯」を単位として、まず、現在島に居住する世帯構成員と島外に居住す

る世帯構成員の全員をアンケート用紙に基づく聞き取り調査から明らかにした。次いで、現在島に居住する世帯員の移住歴、および現在島外に居住する世帯員の移住歴を、現在島に居住する人からの聞き取りにより、それぞれ明らかにすることを試みた。ただ、島外居住者の移住歴については本人がいないため困難であり、また、島内居住者についても被応答者である世帯主以外の者については筆者の調査期間が限られていたという制約から不十分に終わったため、結局、世帯主の移住歴が中心となった。

具体的には、モグモグ島に居住する35世帯の世帯主を対象として移住を中心とした実態調査を行った。この主な調査内容は、

- (1) 現在島に居住している世帯構成員の諸属性（性別、年齢、続柄など）
- (2) 現在島外に居住する世帯構成員の諸属性と彼らの移住に関する諸事項（移住時期、移住先、移住目的、送金の有無など）
- (3) 現在島に居住する人、とくに世帯主の移住歴
- (4) 現在島外に住む人の移住歴

などであった。全体としては、2)の現在島外に居住する者の移住に関する諸事項が中心となった。また、3)と4)の結果が不十分であったことについては、すでに述べた。なお、実際の調査では、筆者は27世帯の面接聞き取り調査を行ない、残りの8世帯については、モグモグ島小学校の校長先生であり、現地での調査協力者でもあったセサリヨ氏に依頼した。世帯主が一時期、島に不在であったり、日中は仕事で時間が取れない場合などは、筆者には調査が不可能だったからである。

第2章 ウリシー環礁島民の人口概況

筆者が行なった調査の結果を述べる前に、センサスおよび現地のインフォーマントから得られた資料に基づき、ウリシー環礁島民の人口の概況について捉えておきたい。

第1節 センサスから見た人口

ヤップ州ウリシー環礁には4つの有人島が存在する(図2-1)(図2-2)。これらの島の近年の人口状況をセンサスにより捉えてみよう。

まず、ウリシー環礁全体の人口の変化をみると、戦後から1977年頃までは人口が一貫して増えてきていたが、これ以降は700人~1000人の間で増減を繰り返している(図2-3)。

全体としては戦後、人口は増えてきたと言えよう。

次に、とくに近年の人口の変化について、ウリシー環礁内の島別に見よう(図2-4)。

全体として1994年が最大で、2000年には減少している。この減少の仕方は、島別ではモグモグ島で減少率が最も高い。男女ともそうである(表2-1)。

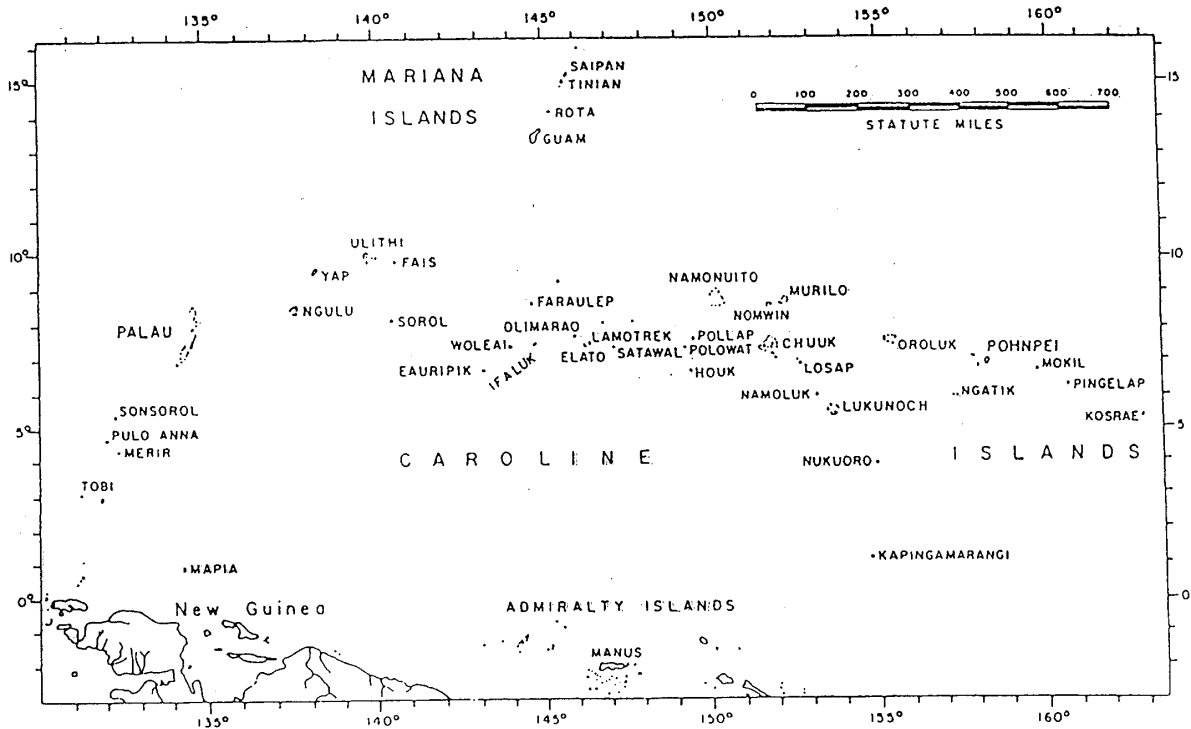


FIGURE 2. Caroline Islands. (Adapted from Alkire 1965)

図2-1. カロリン諸島 (Alkireによる)

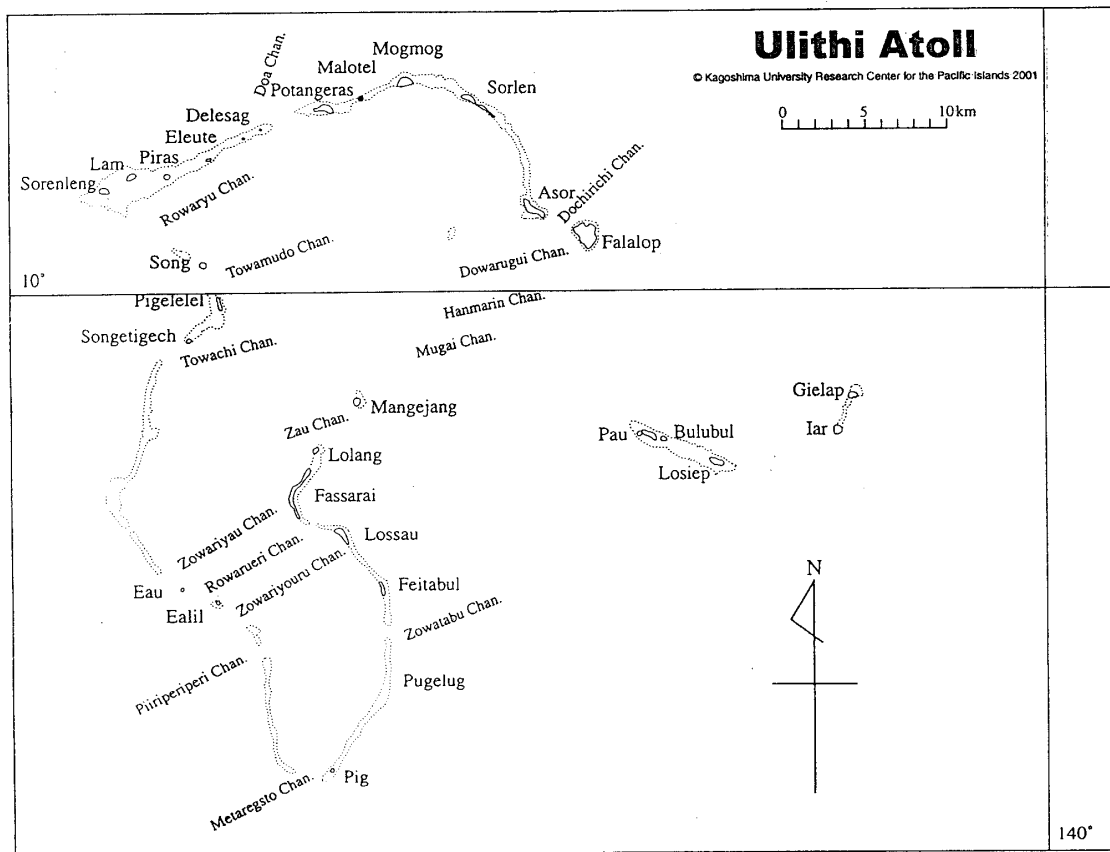


図2-2. ウリシー環礁

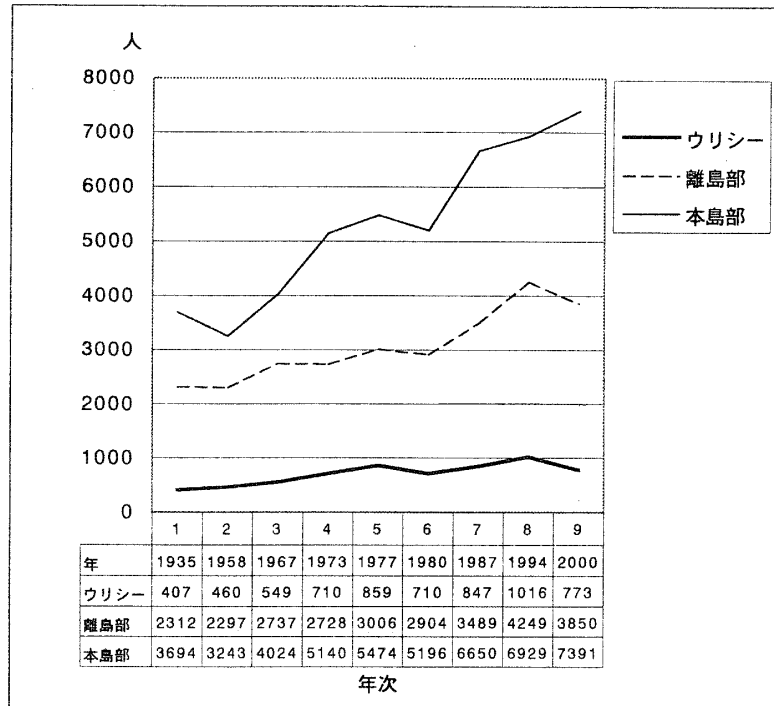


図2-3. ウリシー環礁の人口の推移

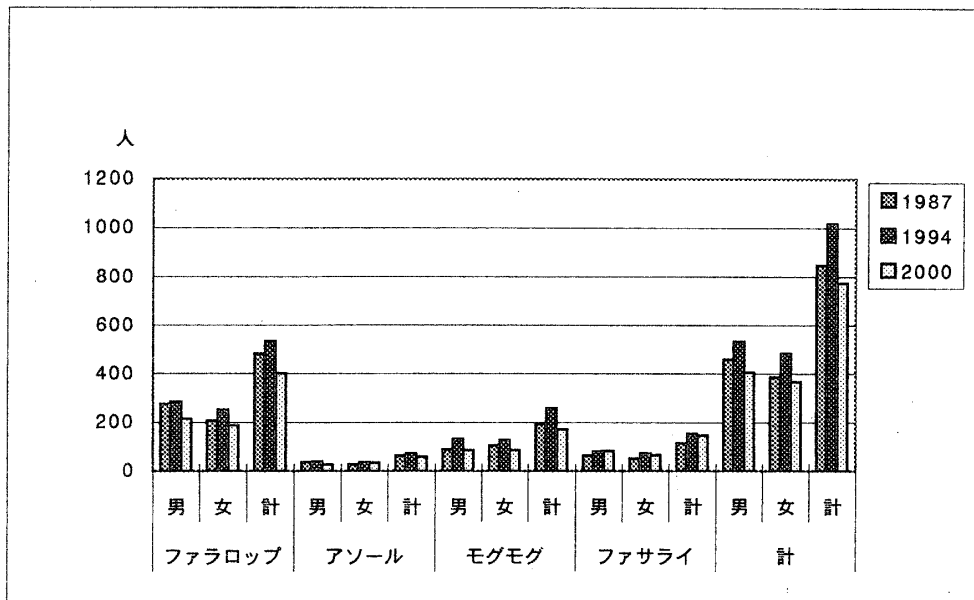


図2-4. 島別・男女別人口の変化

なお、ヤップ州全体ではこの間に人口は減少していない。一時的な離島の「過疎化」が進んだと言えるのかもしれない。

次に、近年の性別・年齢別人口構成を見よう（図2-5）。2000年のセンサスデータにより作成したこの図によると、4島とも人口が少ないので凹凸が目立つが、全体としてほぼピラミッド型に近いと言えよう。ただ、ファラロップの場合は10代後半が特に多くなっている。これは、ここにウリシー環礁唯一の高等学校が設置されているためであると思われる。

次に、センサスそのものにはないが、センサス調査の段階で作成する島嶼別集計表には、家屋の状況についての記録があるので、それを整理した（表2-2）。

これによると、ウリシー環礁の家屋の総数は176個で、このうち149個は人が住んでおり、残りの27個は空屋であることが判明する。この空屋の比率は、アソール島で最も高い（35%）が、モグモグ島もこれに次いで高い（25.5%）ことがわかる。

すなわち、今回の報告の中心であるモグモグ島では47の家屋があり、現在、35世帯が居住していて、12世帯が空屋となっているということが示されている。

もう一つ、この島嶼別集計表ではモグモグ島に限り、各家屋の材質が調査されていたので、これを整理した（表2-3）。

全体としてコンクリート製が最も多く、トタン屋根製が次いでいる。注目すべきはコンクリート製の家屋でも空屋がかなり多いことである。離島現象は家屋の材質とはあまり関係がないようである。

表2-1. ウリシー環礁の島別人口

島名	性別	1987	1994	2000	減少率
ファラロップ	男	275	283	214	75.6
	女	206	249	186	74.7
	計	481	532	400	75.2
アソール	男	35	38	25	65.8
	女	27	35	33	94.3
	計	62	73	58	79.5
モグモグ	男	88	132	85	64.4
	女	103	126	84	66.7
	計	191	258	169	65.5
ファサライ	男	62	80	81	101.3
	女	51	73	65	89.0
	計	113	153	146	95.4
計	男	460	533	405	76.0
	女	387	483	368	76.2
	計	847	1016	773	76.1

注) 減少率は1994年に対する2000年の値

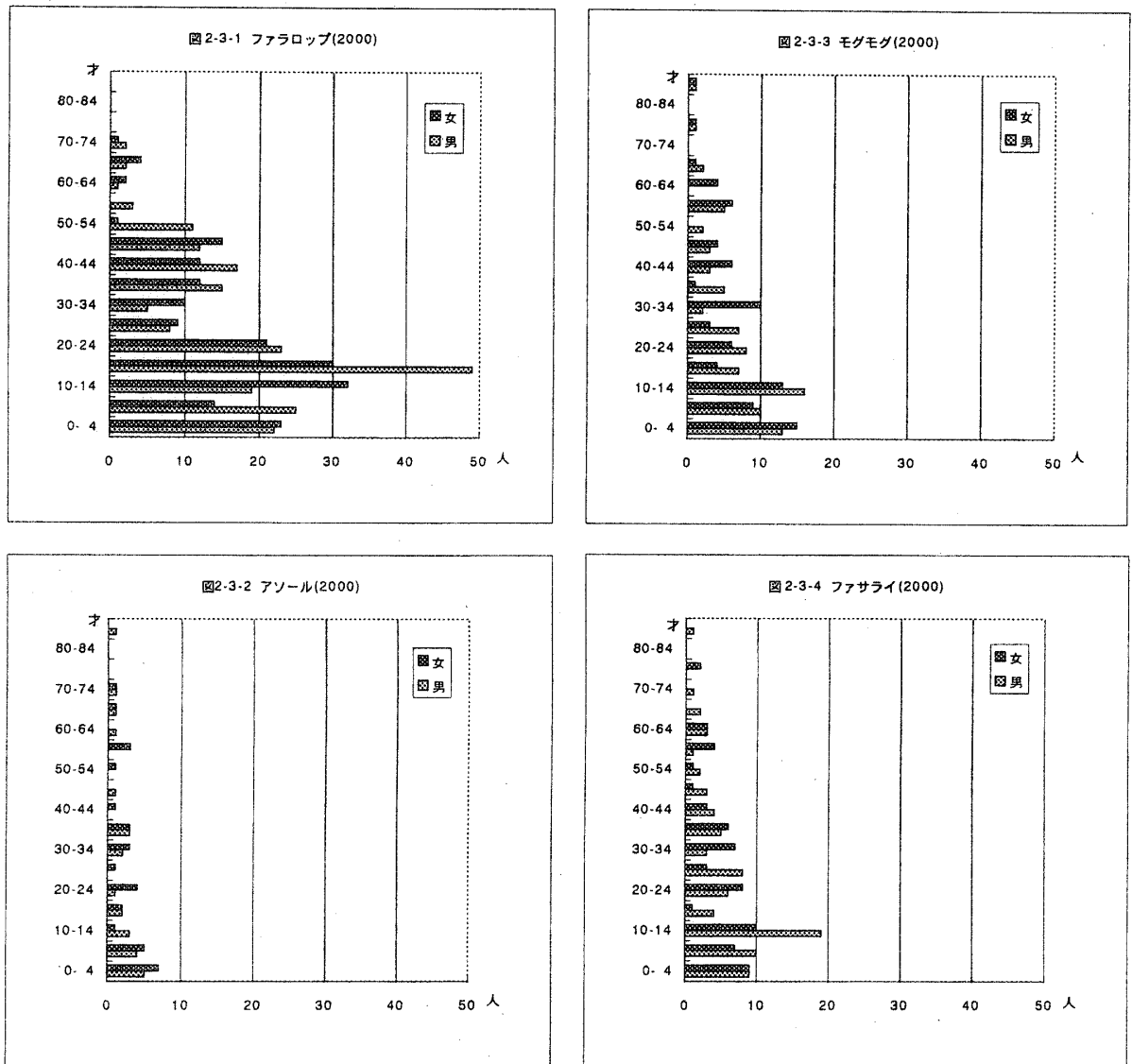


図2-5. ウリシー環礁諸島民の性別・年齢別人口構成(2000)

表2-2. ウリシー環礁における家屋の状況

センサス区	人口	家屋総数	居住	空家	空家の割合
ファラロップ北	123	22	22		0.0
ファラロップ南	277	60	52	8	13.3
アソール	58	20	13	7	35.0
モグモグ	169	47	35	12	25.5
ファサライ	146	27	27		0.0
計	773	176	149	27	15.3

表2-3. 家屋の素材

素材	居住	空家	計	割合
コンクリート	14	6	20	42.6
トタン	12	3	15	31.9
ヤシの葉	3	2	5	10.6
その他	6	1	7	14.9
計	35	12	47	100.0

第2節 世帯状況から見た人口

移住に関する調査を行うには、各世帯の構成員があらかじめ解っていると都合が良い。

そこで、筆者はモグモグ島での協力者ホセ氏に、離島者の調査をしたいので各世帯の全構成員について教えてほしい旨の依頼をした。数日後、氏から帰って来た記録は、モグモグ島35世帯についての、各世帯の構成員名と離島者の行き先・目的が記されたものであり、さらに、かつてモグモグ島に居住し、今は「挙家離島」して他所に住む、31の世帯をも含むものであった。ただし、各世帯の構成員は、氏名のみで性別、年齢、続柄等の記録はなかった。

ここでは、このホセ氏から提供された記録に基づいて、若干の整理を行った。

ホセ氏の資料には、モグモグ島に現在居住している35世帯の他に、多くの他所に住むモグモグ島民世帯が記録されていたので、まずこれを整理した(表2-4)。

島外に住むモグモグ島民世帯では、ヤップ島が最大で16世帯、次いでファラロップが9、ファサライが1、従ってウリシー環礁で10世帯である。以上が主なものであり、これ以外の5世帯を加えて合計31世帯のモグモグ島民世帯が、島外に居住していることになる。すなわち、島居住世帯数とほぼ同数に近い世帯が、島外に居住しているのである。

又、これらの世帯に所属する人数(世帯構成者数)を示したが、これらの人々はその世帯のある場所に全員が居住しているとは限らず、世帯構成員の中には、この場所からさらに他の場所に移動している場合も少なくない。

全体では、これら世帯構成員でその世帯のある場所に住んでいる者は337人であり、ここからさらに別の所へ移った者は99人となった。そして、この99人の移動先の居住地を表の最後に示した。

すなわち、この表の「世帯構成者数」は全モグモグ島民の実際の居住地とは多少異なっている。各地に住む実際のモグモグ島民数は、この表の「当地居住者」数に「他所居住者の内訳」欄に示さ

表2-4. モグモグ島民の居住地

居住地	世帯数	世帯構成者数	当地居住者	他所居住者	他所居住者の内訳						
					Fa	Ya	FS	Gu	Sa	Ha	US
モグモグ	35	261	201	60	9	10	8	14	5	9	5
ファラロップ	9	51	42	9			3	3			3
ファサライ	1	6	5	1		1					
ヤップ	16	96	70	26			10	2		5	9
FSM+パラオ	1	6	4	2			1				1
グアム	2	6	6								
サイパン	1	5	4	1							1
ハワイ											
USA本土	1	5	5								
計	66	436	337	99	9	11	22	19	5	14	19

注) Fa:ファラロップ、Ya:ヤップ、FS:ミクロネシア連邦とパラオ、Gu:グアム、Sa:サイパン、Ha:ハワイ、US:USA本土

れた各島の居住者数を加えた数である。

そこで次にこれを示した(表2-5)。

結局、各地に居住するモグモグ島民は、モグモグ島に46.1%、ヤップ島に18.6%、モグモグ島以外のウリシー環礁に12.8%、ハワイおよび合衆国本土に8.7%、グアムとサイパンに7.8%、ヤップ州以外のミクロネシアおよびパラオに6.0%となった。

以上みたように、モグモグ島民は本来のモグモグ島には約46%しか住んでおらず、半数以上が、島外とくにヤップ島、次いでファラロップ島などに居住していることが明らかとなった。

次に、モグモグ島35世帯の島外居住者60人の移住目的について整理した(表2-6)。

全体では「仕事」が半数を超え、「勉学」がこれに続き、「その他」はわずかである。

また、地域(移住先)による特徴をみると、ファラロップは全員が「仕事」となっており、グアムも「仕事」の比率が高くなっているのに対し、ミクロネシア+パラオと合衆国本土はいずれも「勉学」が圧倒的に多い。残りのヤップ、ハワイ、サイパンはいずれも「仕事」と「勉学」の両方

表2-5. 各地における実際のモグモグ島民数

居住地	世帯数	人数	当地居住者	来住者	総数	割合(島外のみ)	
モグモグ	35	261	201		201	46.1	
ファラロップ	10	57	47	9	56	12.8	23.8
ヤップ	16	96	70	11	81	18.6	34.5
FSM+パラオ	1	6	4	22	26	6.0	11.1
グアム	2	6	6	19	25	5.7	10.6
サイパン	1	5	4	5	9	2.1	3.8
ハワイ				14	14	3.2	6.0
USA本土	1	5	5	19	24	5.5	10.2
計	66	436	337	99	436	100.0	100.0

注) ファラロップにはファサライ1名を含む

表2-6. 移住目的

移住先	仕事	勉学	生活	計
ファラロップ	9			9
ヤップ	5	4	1	10
FSM+パラオ	1	6	1	8
グアム	9	4	1	14
サイパン	2	3		5
ハワイ	4	5		9
USA本土	1	4		5
計	31	26	3	60

注) 生活とは主婦、幼児、病人等のことである。

の目的が存在していると言える。

これらの移住の特徴を、ここではそれぞれ「仕事型」「勉強型」「両存型」と呼ぶことにしたい。

第3章 筆者による調査結果

ウリシー環礁滞在中、筆者はウリシー環礁の有人4島中、ファラロップ島を除く3島の全世帯を対象とした、面接による聞き取り調査を実施した。本稿では、このうちモグモグ島の調査結果について報告する。モグモグ島の現住世帯数は35世帯であり、これらの世帯構成員のうち、島内居住者は165人、島外居住者は91人であった。以下、調査の結果を、1. 個人単位で捉えた移住、2. 世帯単位で捉えた移住、3. 個人の移住暦、の3つに分けて述べることにする。

第1節 個人としてみた移住の諸傾向

1) 移住者の移住先

まず、島外居住者91人の移住先をみると、ファラロップが約2割、ヤップが約3割で、ほぼ半数が近くの島で占められているが、これ以外ではグアム、ハワイ、合衆国本土にほぼ同数の島民が居住していることがわかった（表3-1）。

表3-1. モグモグ島民の移住先

移住先	人数(人)	割合(%)
ファラロップ	18	19.8
ヤップ	27	29.7
チュック	3	
ポンペイ	5	
バラオ	3	12.1
グアム	11	
サイパン	3	15.4
ハワイ	10	
USA本土	11	23.1
合計	91	100

2) 移住先別の移住者の諸特徴

つぎに、これらの移住先の各地域ごとに、移住の諸傾向について検討した。ファラロップへの移住者は18名で10代の勉学を目的とする者が多い(表3-2)。また、20代以上で仕事目的の者も少なくなく、これはとくに20代で多くなっている。

ヤップ島への移住者は27名と最大で、このうち仕事目的が12名と最も多い(表3-3)。次いで、10代を中心とした勉学目的が多くなっている。また、ヤップでは病院を目的とする者がいることが、ひとつの特徴である

ヤップ以外のミクロネシア連邦への移住者はポンペイが5名、チュックが3名、あわせて8名であった。パラオへの移住者もほぼ似た傾向と考えられるので、ここではパラオの3名も含めて、11名を一緒に扱うことにした。

このグループの特徴は、20代の勉学目的が多いことであり、とくに、ポンペイのCCM (Community College of Micronesia) やパラオのMOC (Micronesia Occupation college) かPCC (Palau Community College) が多くなっている(表3-4)。

また、チュックの場合は高校への勉学目的であろうと思われる。

ガムとサイパンもサイパンが3名と少なく、また、似た傾向であると考えられるので、一

表3-2. ファラロップへの移住者の移住目的

年齢	仕事	主婦	勉学	その他	計(男 女)
50才以上		1(0 1)			1(0 1)
40~49	2(2 0)	2(0 2)			4(2 2)
30~39	1(0 1)				1(0 1)
20~29	4(3 1)				4(3 1)
10~19			7(5 2)		7(5 2)
0~ 9				1(1 0)	1(1 0)
計	7(5 2)	3(0 3)	7(5 2)	1(1 0)	18(11 7)

表3-3. ヤップへの移住者の移住目的

年齢	仕事	主婦	勉学	病院	その他	計(男 女)
70才以上	1(1 0)	1(0 1)				2(1 1)
60~69						
50~59		1(0 1)				1(0 1)
40~49	3(2 1)					3(2 1)
30~39	5(1 4)					5(1 4)
20~29	3(1 2)		1(0 1)	2(1 1)		6(2 4)
10~19			6(6 0)	1(0 1)		7(6 1)
0~ 9			2(1 1)		1(1 0)	3(2 1)
計	12(5 7)	2(0 2)	9(7 2)	3(1 2)	1(1 0)	27(14 13)

緒に扱うことにした。仕事目的が多いことが特徴で14名中9名に達する(表3-5)。年齢は20代から40代で、とくに女性が多くなっている。ホテルやレストランの賄いの仕事が推測される。また、ヤップと同様に、病院目的の者がいることに注意したい。

最後に、ハワイの10人とアメリカ本土の11人もほぼ同様の傾向であったので、一緒に扱うことにした。

ハワイやアメリカ本土へ行く目的は「仕事」が最も多く、「勉学」がこれに次いでいるが、この他に「軍隊」や「勉学と仕事」が、ここでの特徴となっている(表3-6)。「勉学と仕事」とは「働きながら学校に通う」または「働いてお金をためて学校に入る」というもので、こうした意味では「軍隊」も、義務が終われば大学での勉学が保障されるということで軍隊に

表3-4. ミクロネシア連邦とパラオへの移住者の移住目的

年齢	仕事	主婦	勉学	計(男女)
50才以上	1(1 0)			1(1 0)
40~49		1(0 1)		1(0 1)
30~39	1(0 1)			1(0 1)
20~29	1(1 0)		5(2 3)	6(3 3)
10~19			2(1 1)	2(1 1)
0~9				
計	3(2 1)	1(0 1)	7(3 4)	11(5 6)

表3-5. グアム、サイパンへの移住者の移住目的

年齢	仕事	勉学	病院	計(男女)
40~49	3(0 3)		2(1 1)	5(1 4)
30~39	3(2 1)			3(2 1)
20~29	3(1 2)	3(0 3)		6(1 5)
10~19				
0~9				
計	9(3 6)	3(0 3)	2(1 1)	14(4 10)

表3-6. ハワイ、アメリカ本土への移住者の移住目的

表3-6 ハワイ、アメリカ本土への移住者の移住目的

年齢	仕事	軍隊	仕事+勉学	勉学	その他	計(男女)
30~39	7(5 2)					7(5 2)
20~29	2(1 1)	2(2 0)	4(1 3)	2(2 0)		10(6 4)
10~19				1(1 0)		1(1 0)
0~9				2(0 2)	1(1 0)	3(1 2)
計	9(6 3)	2(2 0)	4(1 3)	5(3 2)	1(1 0)	21(13 6)

入る者も多く、似た側面を持っていると言えよう。

全体として、このグループの移住者には40代以上の者はおらず、ヤップ本島などと比べると若い者で占められている。

以上を行先と目的でまとめると、(1)グアム・サイパンの仕事型、(2)ミクロネシア・パラオの勉学型、(3)その他の両存型、の3つに整理することができよう。

この基本的な整理に、年齢、性別をさらに加味すると、

- (1) グアム・サイパンの仕事型では、20～40代の女性の仕事が多く、ホテルやレストラン等の仕事が予想されること。
- (2) ミクロネシア・パラオの勉学型では、10代～20代の若者が多く、高校や大学での勉学であること。
- (3) 両存型では、①ファラロップの場合は、仕事は20～40代が多く、勉学は全て10代で、勉学の方は高校の存在に対応していること。②ヤップの場合は、仕事は同じく20～40代に多く、中でも女性がやや多くなっていること。勉学はファラロップと同じく10代に多く、高校やとくにCOMのヤップキャンパスの存在のためと思われること。③ハワイ・アメリカでは仕事は20～30代で、やや若い者のみであり、勉学では、一けた代から20代まで分散的であること、などのことがわかった。

第2節 世帯構成から見た移住の諸傾向

ここでは、移住者を出した世帯とのかかわりで、移住について考察する。

1) 1世帯当たりの移住者数

35世帯の中には移住者を1人も出していない世帯もあれば、多くの移住者を出している世帯もある。そこで、世帯ごとの移住者数に注目して整理した(表3-7)。

1つの世帯から出ている移住者数は8名が最も多い。この8名を出している世帯の数は1世帯だけである。次いで7名を出している世帯が3世帯、6名はなく、5名が3世帯、4名が2世帯であった。

これらの移住者の行き先を見ると、8名の場合はハワイが5人でファラロップが3人、7名の場合は①ファラロップ5人とグアム2人、②合衆国本土5人とヤップ2人、③ヤップ7人、の3ケースであって、世帯ごとに特定の場所に集中していることがわかる。これは、家族や親戚、知人等を頼って移住する傾向があることを示すものであると言えよう。

2) 世帯構成員と移住

次に、世帯の中の続柄に注目して、誰が移住しているかを整理した(表3-8)。

この結果は、世帯による移住傾向の強弱を反映しているものと考えられる。すなわち、①移住者が1人もいない世帯は定住傾向が最も強く、次いで、②世帯主の兄弟・姉妹、③世帯主の子供、④世帯主の親や世帯主自身、の順に定住傾向が弱くなってゆく、と考えられるのではな

かろうか。これを越えると⑤挙家離島ということになるだろう。

モグモグ島では、1人も移住者を出していない世帯は5世帯のみであり、世帯主の兄弟姉妹が出ている世帯が7、子供が出ている世帯が16、親や世帯主自身が出ている世帯が7、という結果で、全体として定住傾向はそれほど強くはない、という結果が示されているように思われる。

表3-7. 1世帯当たりの移住者数

移住者数	世帯数	世帯番号	F	Y	P	G	H	U
8	1	35	3				5	
7	3	8	5			2		
		20		2				5
		29		7				
6	0							
5	3	10	1	3				1
		27		3	1			1
		32	1	2	1	1		
4	2	19				2	2	
		23		4				
3	6	省略						
2	6	省略						
1	9	省略						
0	5	省略						
計	35		10	21	2	5	7	7

注: F:ファラロップ, Y:ヤップ, P:パラオとFSM, G:グアム, H:ハワイ, U:USA

表3-8. 世帯構成員の出島状況からみた世帯類型

世帯類型	世帯数
(1) 離島者がいない世帯	5
(2) 離島者が世帯主の兄弟姉妹のみ	7
(3) 世帯主のこどもが離島	
(3-1) 世帯主の兄弟姉妹の離島者もいる	1
(3-2) 子供の離島者のみで勉学目的のみ	7
(3-3) 子供の離島者のみで仕事目的も	8
(4) 世帯主の親に離島者がいる	1
(5) 世帯主夫婦に離島者がいる	
(5-1) どちらか1人	4
(5-2) 2人とも	2
(6) 挙家離島	
計	35

第3節 移住暦について

前述のように、移住暦の調査対象は世帯主が中心となった。また、世帯主があまり移動しておらず、移住暦がほとんどないという世帯主もいた。こうした中で、筆者が行い得た18名の移住暦に関する調査結果を示す(表3-9)。

この表で14番までは在島者、後の4人はモグモグ島外の居住者である。また、11番までは男性、12番以降は女性である。

- (1) まず、移住暦の特徴に関しては、1~14の島内居住者と15~18の島外居住者との間に大きな差はない、と考えてもよいと思われることである。
- (2) 男性では、勉学のために離島し、これを終えると戻るというパターンが11人中5人と約半数を占めていて、比較的多い。これをさらに細かく見ると、高校のみで戻るケース(2例)と、大学(College)卒業後に戻るケース(3例)の2種類のパターンがある。
- (3) 女性の場合は結婚で移動する例が7人中5人と非常に多いことがわかった。
- (4) この他、この表には示せなかったが、モグモグ島居住者が病気にかかったとき、ヤップ島の病院に行くことはかなり一般的に見られ、その頻度は多い場合は年に2回、少ない場合でも2

表3-9. モグモグ島民の移住暦

番号	年齢	性別	世帯番号	生年	A. P. P.	A. P. P.	A. P. P.	A. P. P.	A. P. P.	A. P. P.
1	59	m	15	1942	25 US S.	27 FA W	57 MO			
2	59	m	35	1942	24 US O	26 PO S	28 HA S	29 MO W		
3	45	m	26	1956	13 FA S	17 MO				
4	42	m	12	1959	18 PO S	20 SA S	21 MO			
5	42	m	28	1959	16 PA S	19 MO				
6	39	m	16	1962	18 PA S	19 MO				
7	38	m	2	1963	18 PA S	20 GU S	22 GU W	28 MO		
8	37	m	18	1964	13 FA S	17 MO	37 YA O	37 MO		
9	31	m	17	1970	9 PA S	13 FA S	17 PA S	20 FA W	29 GU W	30 MO
10	28	m	31	1973	13 CH S	17 GU W	19 MO			
11	27	m	30	1974	17 PO S	22 MO				
12	51	f	14	1950	21 PA S	23 YA O	24 MO	26 CH M	29 MO	
13	49	f	11	1952	20 GU S	22 YA M	35 MO			
14	19	f	11	1982	0 YA	5 MO	16 YA S	18 PO S	19 MO	
15	41	f	3	1960	21 PA S	24 MO	25 PA M			
16	36	f	35	1965	24 PO S	25 HA W				
17	31	f	3	1970	21 PO S	22 GU W	22 GU M			
18	24	f	12	1977	17 HA S	22 US M				

注: A.P.P.:移住年、行き先、目的

MO:モグモグ、FA:ファラロップ、YA:ヤップ、PO:ポンベイ、CH:チュック、PA:バラオ、
GU:グアム、SA:サイパン、HA:ハワイ、US:アメリカ本土
S:勉学、W:仕事、M:結婚、O:その他

～3年に一回程度とも言われている。

- (5) 学校に関しては、高校ではファラロップの高校へ行く者が多いが、ヤップの高校へ行く場合もあり、さらにはチュックの高校の例もあった。また、コミュニティカレッジでは、この18名の中ではポンペイのCCMが最も多かったが、パラオのカレッジもこれに次いでいた。また、数は少なかったが、グアム、ハワイ、アメリカ本土のケースもあった。

第4章 考 察

以上が、筆者の調査時点で、モグモグ島に居住していた35世帯の調査から判明した、移住の実態とその諸傾向である。ただ、筆者の調査では、すでに挙家離島して島外に居住しているモグモグ島民については、その対象に入っていない。この点については、第2章で扱ったホセ氏のデータが、挙家離島した世帯数は31世帯であり、また、その約半数の16世帯がヤップ島に行っていることなどを明らかにしており、筆者自身の調査を補足してくれている。

しかし、筆者の調査結果とホセ氏のデータを整理した結果とが多少異なる点もあるので、最後に、この点について若干の考察を加えておきたい。

その1つは移住者の行き先についてである。筆者の調査結果は表3-1に、また、ホセ氏のデータの方は表2-5の割合の欄で示したが、ホセ氏の方にはモグモグ島の居住者も含まれており、比較のためにモグモグ島の居住者46.1%を取り除いて、残りを100%で計算した結果を（島外のみの欄）に示した。

筆者の表3-1とホセ氏の表2-5を比較すると、筆者の方はヤップやファラロップなど近くの島で数値が小さく、ハワイ、アメリカ本土など遠くの地域で数値が大きくなっているのに対し、ホセ氏の方は逆に、近くの島で大きく、遠くの地域で小さくなっている。この原因は、ホセ氏の方には挙家離島者が含まれており、彼らの多くは近くの島へ行っているため、近くの島の数値が大きくなっているものと思われる。

言い換えると、行き先については、両者の結果には大きな差異はほとんどなく、ほぼ一致していると言えるであろう。

検討すべきもう1つの点は、移住目的と移住先のタイプをめぐってである。

ホセ氏のデータによる結果は表2-6に、また、筆者の調査の結果は表3-2から表3-6に示してある。

まず、両方とも現在モグモグ島に居住する世帯からの移住者であることを確認しておきたい。しかしながら、その絶対数がホセ氏のデータでは60名、筆者の調査では91名と異なっている。この理由は明確ではないが、ホセ氏のデータの方は家族構成について筆者が依頼した際に、補足的に付け加えてくれたもので、移住状況については必ずしも正確なものではないと思われること、また、

ファラロップへの高校生データのデータなどが欠けているのも、このせいではないかと思われる。

なお、ファラロップの高校生について言えば、授業のあるウィークデーにはファラロップで生活し、週末にはモグモグ島へ帰ってくると言われており、こうした意味で、彼らを表2-6に含めなかったのかも知れない。

さらに、表2-6には病院目的の者なども欠落している。

以上のように考えると、全体として、筆者の調査の方が正確であると考えても良さそうである。

以上を前提として、各島別の目的について両者を比較する。その際、グアムとサイパン、ハワイとアメリカ本土については、筆者の方の整理にあわせて一緒に扱うことにする。

まず、ミクロネシア+パラオの勉学型、グアム・サイパンの仕事型、ヤップの両存型については、両者とも一致している。また、ハワイとアメリカ本土についても、仕事対勉学の割合がホセ氏のデータでは5対9、筆者の調査では9対5であるが、筆者の調査では仕事+勉学や軍隊のような中間型があわせて6例あり、総合して考えると両者とも両存型として考えても差し支えないと思われる。

残る問題はファラロップで、ホセ氏のデータでは9対0、筆者の調査では7対7であって、かなり異なっているが、これはホセ氏のデータでファラロップへの高校生を欠落させているとすれば、ファラロップの場合も両存型と考えることができる。

以上のように考えると、

(1) グアム・サイパンが仕事型

(2) ミクロネシア+パラオが勉学型

(3) これ以外、すなわちファラロップ、ヤップ、ハワイ・アメリカ本土の3つが両存型ということになり、この結果は第3章第1節で述べた筆者の調査結果と一致している。

以上の考察から、モグモグ島民の移動パターンは、上記のような特色を持つものであるということが明らかとなった。

参考文献

TAJIMA, Y. 2001a. Outers moving in : the residence of outer islanders in Yap Proper. Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands, Occasional Papers No.34, 25-32。

田島康弘 2001b. ダバッチ —ヤップ島に建設された離島民の新たな集落— 南太平洋研究22-1 : 13-30。